

# 被害者としてのドイツ人—アルノ・ズルミンスキの長編小説『ヨケーネンあるいは東プロイセンからドイツまでどのくらい走るのか』

宮内俊至

東方出身の作家としてまっさきに想起されるのはギュンター・グラスとジークフリート・レンツであろう。レンツは1926年に東プロイセン・マズーレン地方の中心都市リュクで、グラスは1927年にダンツィヒで生まれている。二人とも戦争末期に少年兵として出征した経験を持っている。この二人よりも7、8年後に東プロイセンで生まれた作家がいる。アルノ・ズルミンスキである。東プロイセンのほぼ中心部にある小村に生まれ、戦争が終わった時には10歳、両親はシベリアに抑留され、11歳の時にドイツに強制移送されている。その経験、すなわち、ソ連軍の侵攻、逃避行、両親との離別、そしてドイツへの追放などが彼に小説を書かせる原動力になった。戦後しばらくの間、過去の克服というテーマのもとに幾多の作品が書かれた。グラスは初期の長編小説『ブリキの太鼓』や『犬の年』でナチスの共犯者としてのドイツ人の罪を告発し、レンツは『国語の時間』においてドイツ人の過度な義務への忠実さに焦点を当てた。そして、そのような一連の創作活動がようやく衰えを見せ始めた頃、ズルミンスキは自らの体験に基づいて、被害者もしくは犠牲者としてのドイツ人という視点から『ヨケーネンあるいは東プロイセンからドイツまでどのくらい走るのか』<sup>(1)</sup>を書いた。本稿ではこの作品を対象に、グラスの『ブリキの太鼓』<sup>(2)</sup>とレンツの『郷土博物館』<sup>(3)</sup>との比較を若干交えつつ、ズルミンスキの創作の意図と原点を考察してみたい。

すでに触れたように『ヨケーネン』は自伝的色彩の非常に濃い作品である。主舞台となる村ヨケーネンは著者の故郷イェークラクと場所も規模も同一と見てよく、著者と主人公の少年の生年月はまったく同じであり、両者の父親の職業も同じ仕立屋である。両親がソ連軍に連行・抑留されたのも、孤児となってドイツに移送され、子沢山の家庭に養子として迎えられたのも一致している。それは、ドイツ辺境の小村での10年にわたる牧歌的で幸せな幼少年時代、そして戦争末期の恐怖と悲惨、この激変と言うも愚かな変化が及ぼした影響がいかに大きかったかを物語っていると言えよう。

ところで、東プロイセンとはどのような土地なのだろうか。レンツは短編集『ズライケンはかくも優しかりし』の「あとがき」の中で自らの故郷について次のように述べている。

私の故郷はいわば歴史の背後に隠れていました。有名な物理学者を生み出しもしなければ、ローラースケートのチャンピオンや大統領を輩出したこともありませんでした。そしてこの地に見られたのは、人間社会の中に埋もれている金なのです。つまり樵と農夫、漁師、現物給与の労務者、零細手工業者、そして箒作りなどでした。彼らは日々淡々と辛抱強く生きていました。そしてお互いに口を開くとなると、古くさくなったニュース、羊毛刈りや泥炭掘り、満月やそれが今度のジャガイモに及ぼす影響

とか、キクイムシのこと、あるいは恋愛について話すのです。"<sup>4</sup>

このマズーレンに隣接し、同じように歴史から置き去りにされたような寒村ヨケーネンに、小説の主人公となるヘルマンが誕生する。それは1934年8月2日、すなわち第一次大戦初期タンネンベルクでロシア軍を破ってドイツと東プロイセンを救った英雄ヒンデンプルクの死んだ日であった。ここで「歴史の背後に隠れていた」村ヨケーネンは歴史とつながることになる。「というのも、それは彼[ヘルマン]の歴史であると同時に200人のヨケーネンの魂の歴史でもあるから」(6)である。かくしてヨケーネンの村人の1934年8月2日から1945年のクリスマスまでの歴史が始まる。それは、村が徐々にナチスの茶色に染まっていき、最後に破局を迎える歴史にほかならないのである。

ヘルマンの父親カルル・シュテプタートは仕立屋であると同時に村長の座に就いている。彼が村長になったのは1924年、ケーニヒスベルクでの修業を終えて村に戻った時のことであった。村人は彼が最も優れた学童であったことを覚えていたからである。もっともシュテプタートは快く引き受けたわけではない。彼の逡巡に決着をつけたのは、大農場主の「われわれにはここに相応しい村長が必要なんだ」という一言であった。大農場主は第一次大戦時に少佐であったために、村人から少佐と呼ばれている。村に少佐に逆らえる者はいない。「少佐はまさに少佐であった」(17)とあるように、少佐はかつての領主とほぼ同等の権限を有しており、ヨケーネンには前世紀の封建的とも言える雰囲気や慣習が色濃く残っているのである。

村人は殆ど全員が愛国心厚く、また保守的である。彼らは「骨の髄までドイツ国家主義者で、ヒンデンプルクへの忠誠心を抱いていた」(16)のである。こうした精神的風土はナチスにとって格好の土壌となる。村人は何の疑念もなく党の手帳と党章をもらい、寄付金を払い、ヒンデンプルクの写真の横にヒトラーの写真を掲げる。村長は新しい時代の印として郡発行の官報と「フェルキッシャー・ベオーバハター」とを定期購読するようになる。とはいえ、ヨケーネンにおける旧帝国国旗の「黒白赤から茶色への変色」(19)はまだまだゆっくりしたものであった。『ブリキの太鼓』に見られる大規模で華やかな集会や行進などの示威運動は、このあまりにもちっぽけな村には無縁だった。一帯の中心都市ドレングフルトのNSDAPの支部が村で唯一の居酒屋でささやかなパーティを催したのが関の山であった。

もちろん中にはわずかながらナチスの色に染まらない人間もいる。少佐は依然として旧帝国への忠誠を保ち続けており、自邸には常に黒白赤の旗を掲げている。1934年4月20日、すなわちヒトラーの誕生日に、シュテプタートが初めてハーケンクロイツ旗を庭に翻させた際には、少佐は荷馬車に堆肥を積んでやってくるや、それを自らの手で農地に蒔くのである。もう一人はヘルマンの伯父フランツで、彼は反ナチスというよりは戦争そのものに反対している。ところが、その彼も危うく入党しそうなことがある。それは、党が債務を負った大農場を農民に分譲したことに感銘を受けたからであった。しかし彼はすぐにナチスの欺瞞に気づく。つまり、彼らは農民の前では農民の側に立ち、労働者の前では労働者の側に立ち、農場主の前では農場主の側に立つことを悟ったからである。彼らは誰にでも希望を吹き込み、そして人々の魂を奪うことを見破ったのである。さらにもう一人、共産主義者がいる。それは壁職人のザイトラーで、彼はその昔赤旗を振ってでデモ行進に

参加した過去を持っている。しかしながら、いまでは年金生活を送っている高齢者にすぎない。

一方積極的にナチスに傾いていく人物も皆無ではない。少佐のもとで搾乳夫として働くアウグストはSSに入隊し、ワルシャワのユダヤ人ゲットーの一掃にも参加する。そしてもう一人は大農場検査官のブロンスキである。常に「小柄な」と形容される彼はイデオロギーに共鳴したというよりは自らの出世のためにナチスの制服を身にまとうのである。徴兵の危機に直面した際には、占領した東部地域において経験豊富な大農場経営者が求められていることに目をつけ、急遽ウクライナの大農場に赴くという持ち前の要領のよさと行動力を発揮するのである。

ヨケーネンにまだ電気が来ていないということは象徴的である。ヨケーネンは情報から切り離されている。外部とのつながりはひとえに村長宅の電話と彼が購読する官報とナチスの機関紙を通してであり、それは当然のことながら極めて一面的かつ不十分な情報しか提供しない。そこから一種の悲喜劇が引き起こされる。そしてそれは地域の中心地ドレングフルトですら変わらない。帝国でクリスタルナハトが吹き荒れた日、ドレングフルトのSA支部は眠っていた。つまりこの田舎町にクリスタルナハトは無縁だったのである。翌日になって初めて情報に接したSAは行動を起こそうとするが、町にはユダヤ人がたったの3人しかいない。一人は戦傷者、一人は高齢者、残る一人は服地商を営むザムエル・マテルンである。SAはある夜、行商から帰る途中のマテルンを襲う。とはいえ、彼を後ろ手に縛り上げて馬車につなぎ、商品袋に黒ペンキでハーケンクロイツを殴り書きしただけで、マテルンの所持金にも手をつけないというたわいない所業にすぎない。SA支部長ノイマンは詳細な活動報告書をラステンブルク市のSA郡指導部に送付するものの、まともには取り合ってもらえない。ノイマンにしてみれば、町にいる「すべてのユダヤ人が自然にこの世に別れを告げる前に、輝かしい活動がなされねばならなかった」(26)のである。そこで彼らはマテルンの商店を閉鎖し、それを誇らしげにラステンブルクに報告する。ところがラステンブルクでは、帝国内にまだユダヤ人の商店が残っていたことに驚愕し、直接行動に出てマテルンを連行するのである。このノイマンに輪をかけて情報に疎く、また認識の限界を示すのがシュテプタートである。彼は、マテルンの「常にまっとうな商売をし、ドイツ人を騙したこともなければ損害を与えたこともないことを証明してほしい」

(102)という懇願に対して、迷った末にノイマンに宛ててマテルンを擁護する手紙を書く。「まっとうなユダヤ人とまっとうでないユダヤ人を区別することは総統の意思に叶っているはずで。例外があつてしかるべきです。まっとうなユダヤ人は別の扱いを受けるべきです、例えばこのザムエル・マテルンのように」(103)と。シュテプタートはユダヤ人をも道義的・倫理的な尺度で見ようとしているが、それは彼がナチスの人種政策、反ユダヤのイデオロギーを理解も認識もしていないこと、すなわち中央に盲従するだけの国家主義者であることを明らかにしているのである。

ヘルマンは、ヒトラーユーゲントの隊長になることを夢見るような軍国少年として育っていく。その対照的な存在として、かつヘルマンの親友としてペーター・アシュモナイトがいる。二人の最初の出会いが、彼らの性格が対照的であることを如実に物語っている。先に述べたNSDAP主催のパーティには子供たちも招かれていた。なにしろ「子供たちは未来である」(19)からだ。さて、そのパーティでヘルマンは他の子供たちが手にして

いたハーケンクロイツの小旗を欲しがり、母親マルタがある少年からわずかな小銭と引き換えにそれを手に入れてやるのだが、その少年がペーターである。ヘルマンはあっさりと小旗を売ってしまうペーターに驚きを禁じ得ないが、ペーターにしてみればハーケンクロイツには一銭の価値もない。彼にとって価値あるものといえば、食べるものにほかならない。彼はヘルマンよりも2歳年上の、村に大勢いる大農場に雇われている現物給与労働者の子で、父親はすでに戦場におり、母親が働きに出ていた。ペーターは自分と盲目の祖母のために、大農場の池から魚を盗み取って料理するといった具合に、食料の不足を自己調達で補う必要に迫られている。因みに、このペーターの姿には、両親と引き離されてからドイツへ移送されるまでのしばらくの間、人も殆ど住んでいないような土地で一人で生きていかなければならなかった著者の経験が投影されていると見ることができる。さてペーターは、後に父親の戦死の報に接した時、凍死したのだらうと言う祖母に強く抗弁し、戦死を主張して父親の名誉に拘りを見せるが、それを例外として彼は戦争を常に冷めた目で見ていた。彼がヘルマンとともにビートを貯蔵してある室に潜り込む場面を見てみよう。

「こういうビート室はいい隠れ家になるな」とペーターが言った。「ロシア人が来たら、この中に潜り込むんだ、そしたら見つからないさ」

「何でロシア人が来るの？」とヘルマンは不思議そうに訊いた。

「連中だって負ける時もあれば勝つ時もあるさ」とペーターは、室からビートを、池から魚を盗むことができれば、そんなことはどうでもいいことであるかのように言った。(112)

あるいはヘルマンが、ラステンブルクに来る総統を見に行こうとペーターを誘う場面。ペーターは「総統はぼくたちに5マルクくれるだろうか」と言ってヘルマンの気分を損ねる。

ヘルマンはむっとして黙り込んだ。ペーターは何でも冷めた目で現実的に見る、訊くことといえば、魚を捕れるか、リンゴを盗めるか、あるいは何かもらえるかということばかりだった。(174)

ペーターのこうした現実主義的な在り様は彼に特有のものというわけではなく、村の大人たち、中でも女たちの間に広く見られる。例えばフランツ伯父の妻ヘートヴィヒは戦意高揚のスローガンが書かれた横断幕を見てもまったく関心を示さない。「勝利」とは彼女にとって占領地の名前同様馴染みのないものであり、彼女の頭を占めているのは農作物でしかなく、「雑草に勝利する、それがヘートヴィヒ伯母の世界だった」(177)のである。すでにドイツ軍はスターリングラードで敗北を喫しているが、まるで陸の孤島のようなヨケーネンはまだ戦争から遠く離れている。

バーデン・バーデンでの静養から戻った少佐は、ヨケーネンの情報から隔絶された、あるいは情報に鈍感な状態を改めて浮かび上がらせると同時に、ヨケーネンを体現していると見ていいシュテプタートの愚昧な精神をも照らし出す。「アメリカは毎日何百機も飛行機を造っている。われわれはそんなにたくさん撃ち落とせるわけがない」(129)という少佐の発言に対してシュテプタートは、いまだに旧帝国に忠誠を誓う老人の繰り返すにすぎな

いとみなし、さらに少佐が「SSがユダヤ人に何をしているか知っているか」とユダヤ人の虐殺を示唆すると、それは敵が流している噂であり、「ドイツ人にはユダヤ人を殺す必要がない。彼らは外国へ行かされたり、収容所で働いたりしているんだ」（129）と反論する。彼のこのような愚直なまでのナチスへの信頼はフランツ伯父との対話にも現れる。ヒトラー暗殺未遂事件に関してフランツは「遅すぎる、5年遅すぎた」（206）と言うと、シュテプタートは不謹慎だとなじり、フランツも戦争初期の対仏勝利を賞賛したことを指摘するが、フランツの「5年間戦争が続いた後に考えを変えるのは恥ずかしいことではない」（207）との言葉に黙るしかない。ドイツ軍が撤退につぐ撤退を続け、ドイツ全土が瓦礫と化しつつあることはシュテプタートも否定し得ない。それでも彼はヒトラーへの信頼と期待を捨てられない。「しかし何か奇跡的なことが起こるだろう、誰も可能だと思わなかったようなことが。アドルフ・ヒトラーは次々に奇跡を起こしてきたのだ。」（207）

少佐とフランツ伯父、そしてもう一人ヒトラーに批判的な人間がいる。少佐の息子ジークフリートである。彼は戦争初期にダンケルクでの功績によって騎士十字勲章を授与されて中佐に昇進した、村が誇りとする人物であったが、ヒトラー暗殺に関与した廉で逮捕される。少佐の妻と中佐の妻との会話の中でその動機が明かされ、さらにヨケーネンの村人の性格が明示される。

「いつから彼はヒトラーに反対だったの」

「1941年からです、ロシアへ侵攻した時からです。条約を結んでおきながら、その条約の相手を襲うことは許されない、と彼はいつも言っていました」

「私には一言も言ってくれなかったわ」と少佐の妻は不平を漏らした。

「わかってください、お母様。この人たちはとても純朴なのです、人を信じやすいのです。話すわけにはいきません……」（214f.）

村人が戦争の現実を直接目にするのは、敵の捕虜が送られてきた時である。そしてそれは政治的プロパガンダを通して形成された先入観を正す契機ともなる。すなわち村人は敵兵もまた同じ人間であることを認識させられるのだ。まずポーランド兵捕虜が送り込まれるが、「ヨケーネンは思ったよりも早くよそ者に慣れていった。[中略] 毎日一緒にいることが別の世界を開いた。それは新聞に載っていたあの誇張された相違とは大きくかけ離れていた」（65）のである。続いて30名のロシア兵捕虜が姿を現す。シュテプタートが持病の腰痛を悪化させて動けなくなった際、大農場財務官のミコタイトは2名のロシア人を労働力として提供する。シュテプタートのもとに徒弟として住み込んでいるハインリヒは「まともな人間に見えるじゃないか」と訝るが、「きっとミコタイトが一番いい連中をくれたんだ」（188）と思うことで自らを納得させる。このハインリヒの目はまだ先入観に曇っているが、9歳のヘルマンは現実を素直に受け入れるだけの精神的柔軟性を備えている。彼は、「想像していたロシア人とはまったく違う。このような人たちを撃ち殺すなんてとても信じられない。近くで見れば、誰でもずっと人間的に見える。人を殺し合うようにしむけるのは異なった観念なのだ。観念こそが世界を邪悪にしているのだ。」（189）と思う。もっとも、特に後段は、わずか9歳の子供が考えるにははिसさか不自然な印象を与える。これはヘルマンの口を借りる形で、いわゆる全知の語り手（著者）の見解が述べられ

ていると見るべきで、同書の特徴の一つであると同時にブルミンスキのスタイルでもあることを付言しておきたい。

44年秋、西を目指す避難民の姿が見られるようになった頃、突然ブロンスキが村に戻ってくる。1年半ほど前、少佐の葬儀にウクライナから駆けつけ、党の制服に身を固めた彼は、少佐の邸に掲揚された旧帝国旗をこき下ろし、ヨケーネンを「眠り惚けた時代遅れの寒村」と批判し、「ドイツ全土に吹いている新しいドイツ精神」(158)を声高に叫んでナチスの理念を鼓吹していたブロンスキとは打って変わって薄汚れた身なりである。ミコタイトはその様子から「ウクライナから歩いてきたのだな」(221)と推測する。そして「スラブの土地にドイツの防衛村」(158)を建設すると豪語していたのとは正反対に、即刻逃げるべきであると主張する。状況を正確に把握していると思われるブロンスキとは対照的に、ミコタイトは陸の孤島ヨケーネンの住民に相応しく、「それほど悪い状況には見えないじゃないか」と述べ、さらに「総統が約束してくれたんだ、東プロイセンを守ると」(222)と、シュテプタート同様ヒトラーへの揺るぎない信頼を見せる。またブロンスキが村にまだ敵の捕虜がいることに驚きを禁じ得ないでいると、ミコタイトは「ビートの収穫のために必要なんだ、ロシア人がいなければ引っこ抜けやしない」(223)と反論する。ミコタイトには戦況よりも明日のビートの方が気にかかっている。この点では彼もまたペーターやヘートヴィヒと変わらず、極めて狭い視野しか持ち合わせていないと言えよう。

フランツ伯父の言う「ヨケーネンでの最後のクリスマス」を迎えた頃には状況はかなり悪化しており、かつては東へ向かっていた軍の車両や兵士が西へ移動してゆく。ヘルマンは「どうして西へ向かうのだろう」(251)と訝り、ソ連軍の砲撃に対して、村の墓地に陣取ったドイツ砲兵隊が反撃しないのを不思議に思う。ヘルマンは依然としてドイツの勝利を信じて疑わない軍国少年のままである。父親のシュテプタートもまた一向に動く気配を見せない。フランツに「せめて女子供は安全な場所に移さねばならない」(239)と言われても、「模範を示すことを自らの義務とみなしていた」(240)シュテプタートは、村人の手前、自分の妻子を避難させることに躊躇する。この過剰な義務意識は頑迷さと表裏一体の関係にあり、この点でシュテプタートはレンツの『国語の時間』の警察官オーレ・イエプセンと同類である。小村の警察官であるイエプセンがベルリンからの指令に絶対服従の態度を貫くように、シュテプタートも大管区長直々の命令を受けて村に留まろうとする。一方マルタは、第一次大戦時の経験に心の安寧を見出している。すなわち、村に現れたコサックのロシア兵が彼女ら子供たちのためにスモモの木を揺すって果実を落としてくれた出来事である。マルタは折に触れその情景を思い出しては、当時と同じように今回もまたそれほど酷いことにはならないだろうと思っている。そして「ヨケーネンでは誰も何も悪いことはしなかった、誰もが義務を果たしただけ。だからきつとうまくいく」(232)と一種の因果律に望みを託すのである。

壁職人にして共産主義者のザイトラーもまた彼なりの拠り所を持っている。つまり赤旗である。彼は、ロシア兵に赤旗を見せれば殺されることはないと感じているため、最後まで村に残る。しかし皮肉なことに、このザイトラーがまさきにロシア兵によって殺されることになる。彼が掲げた赤旗に対してロシア兵は一片の意味も価値も認めない。ザイトラーの個人的な思い込みや期待も、マルタの楽天主義も戦争という現実の前にはまったく無力である。

戦争という現実には実際的な能力をもって対処できるのは、村ではただ一人ブロンスキがいるだけである。いよいよとなると、彼は馬を駆って村中に触れて回り、隊列を組織してその先頭に立ち、村人のための宿泊所を手配する。この逃避行の際のブロンスキは単に抜け目がなくて要領のいいだけの男ではなく、ヨケーネンと村人たちへの愛情と責任を持ち合わせ、かつ一団を率いていけるだけの能力と器量を有する人物であり、さらに村の男たちの中でただ一人逃避行に成功し、戦後も西独において成功を収める希有な存在である。シュテプタートやミコタイトとはまったく異なるタイプであるが、それは単なる偶然ではない。彼はヨケーネンに滞在して9年になるという記述があることからすると、大農場検査官として派遣されてきたものと見られる。すなわち、「よそ者」と呼んでもいい人物であることに留意しておきたい。

逃避行の行く手を遮るものは多々あるが、その最たるものがドイツ軍である。彼らもまたロシア軍から逃げており、自身の避難を優先させる。そのために避難民は長時間にわたって足止めを強いられるのである。自国民を犠牲にしてまで生き延びようとするドイツ軍への批判がここに見られる。グラスの『プリキの太鼓』でも、逃避行の記述はごくわずかではあるが、ドイツ軍を批判していると思われる箇所がある。第2部の終盤で「消毒剤」と題された章中、東方から逃れてきた女医がこう語る。「ケーゼマルクでは東プロイセンの子供輸送隊といっしょに渡し場まで来ました。でも渡れなかったのです。軍隊だけでした。それで4千人もの子供たち。みんなやられてしまったんです。」(340)ズルミンスキはまた長編小説『ボルニンケンあるいはあるドイツの恋』においても、東方から西独へ逃れた人物をして「東プロイセンでは兵士よりも民間人の死者の方が多かったのだ。人口の5分の1が死んだが、それもただ逃げるのが遅れたからだ」<sup>6)</sup>と語らせている。

結局、ロシア軍に追いつかれて逃避行は失敗に終わる。だが、ここからが真の悲劇、すなわち、殺害、略奪、暴行、抑留そして追放と続く悲劇の幕開けとなる。レンツの『郷土博物館』においても東から西への逃避行がおよそ40頁にわたって詳細に叙述されるが、逃避行が成功するということがあっても、被害というべきは、避難民を乗せた輸送船が一隻ロシア軍によって沈没させられる一件だけである。殺害、暴行等に関わる個別具体的な描写は皆無と言っていい。ところが『ヨケーネン』では、それこそが著者の目的であるかのように、詳述される。村の女たちはマルタも含めてロシア兵の「女来い！」から逃れることはできないが、「小柄な白い女性」と呼ばれる、ヒトラー暗殺に関与して逮捕されたジークフリートの妻は、病身にもかかわらずロシア兵によって繰り返し暴行を受ける。その描写の一部を『プリキの太鼓』におけるグレフ未亡人の場合と比べながら見てみたい。

無精髭が彼女〔小柄な白い女性〕の顔をちくちくと刺した。男は彼女の手を鉄罫のようにつかんだ。彼女は男根をつかまされた。温かいねばねばした精液で下着が汚されるのを感じた。男はねばっこい膿のようなものの上に覆い被さり、彼女は男の重みで押し潰されそうになった。男はごつごつした軍靴で彼女の足を押し広げた。(294)

四角張った制服をつけた連中の中の三名が、すぐにグレフ未亡人に興味を持ったので、硬直していた一座の中へ一種の動きが生じた。あのように長い未亡人生活とそれに先立つ禁欲の四旬節以来、このように活発な殺到をほとんど期待していなかったグ

レフ夫人は、はじめのうちはまだびっくりして悲鳴をあげたが、たちまちのうちに、彼女にとって忘却の彼方にあった例の姿勢に慣れていった。(324)

そしてもう一つ例を挙げてみよう。

小柄な白い女性は、優しく扱われることはなかったにもかかわらず、失神することなくその夜を耐え抜いた。(299)

グレフ未亡人も、今度は、ほくたちに手を貸してくれなかった。なにしろ、彼女の住居は、ロシア兵でいっぱい、彼女の歌声まで聞こえてくる始末だったから。(329)

両者の違いは明白であろう。「小柄な白い女性」は連夜の度重なる暴行により病状が悪化し、村に戻ってからほどなくして死ぬ。一方、グレフ夫人はロシア兵によって生気を与えられ、若さを取り戻したと言ってもいいであろう。もちろん、レンツにしろグラスにしろ、その意図は、加害者もしくは加担者としてのドイツ人の罪を追及することにあつたわけであるから、東方ドイツ人が戦争末期に被らざるを得なかった非道で残虐な行為を指摘したり告発したりすることになつたのは当然である。とはいえ、いささか筆が鈍っているという印象は否めないのではないだろうか。もっともグラスの場合、上の例では、誰も相手にしない女に喜んで乗るロシア兵と敵兵に喜々として身を委せるドイツ女という、滑稽でグロテスクな図式でもって当時のドイツを「惨めなドイツ」として揶揄していることを見ることは難しくないであろう。だが『ヨケーネン』では、戦争の犠牲者としての女たちの苦悩が直截に描かれ、強調されているのである。「1945年4月、女たちは何について話していたのだろうか」と語り手は問い、そして次のように答える。

彼女たち、東方ドイツの女たちが後始末をしなければならなかつたことについて。彼女たちが赤軍兵士全員を自分たちの体の上に乗せなければならなかつたことについて。望まない妊娠について、性病について、疥癬とらい病についてだった。(334)

結局、逃避行に出たおよそ200名の村人のうち18名が村に戻る。遅れてペーターも母親とともに戻ってくる。彼らはボンメルンまで行ったが、西の方から、すなわち前方からロシア軍が現れたために引き返さざるを得なかつたという。「アシュモナイト夫人は……性病を持ち帰った」(333f) という記述から、彼女もまたロシア兵に暴行されていたと想像される。また、途中連行されたシュテプターも腰痛が悪化して歩けなくなったことが幸いして解放され、帰ってくることができた。家族3人に平穏な生活が再び訪れたのも東の間、まずシュテプターが、続いてマルタが連行される。シュテプターは、ロシア兵が姿を現した時、あえて逃げることをせず、それどころか彼らの尋問に対して自ら進んで党员であつたこと、村長であつたことを認める。彼は、「正直である」ことには力があると信じていたし、罪の意識もなかつたからだ。「正直」も「無罪」も彼を救いはしない。だが彼は、妻子に別れを告げると自己の信念を抱いたまま、「ヨケーネンからシベリアへと行進していった」(327) のである。一方マルタの連行は、ヘルマンの不在時になされ、ま

た具体的な記述もない。最愛の息子に別れの言葉をかけることすら許されず、永遠の別れをせざるを得なかったマルタの心の内について語り手は何も語らない。それは、語り手にとって、つまりは著者ズルミンスキにとって、彼女の悲哀が語るができないほど大きかったことを物語っているのではないだろうか。一方、幼いヘルマンの「なぜ？」に対して村人の誰も説明できない。バイヤースドルフが指摘するように、「ママが何をしたの？ただ歌がうたえて、陽気に振る舞うことしかできなかったのに。何もかもうまくいくと信じていただけなのに。そう信じるのが悪いことだったの？」(329)というヘルマンの素朴な問いに答えるのは難しいであろう。<sup>6)</sup>

「1945年12月11日の午後、ヨケーネンは再び世界史とつながった」(383)と語り手は述べる。「世界史」とはポツダム会談であり、その決議による残留ドイツ人の追放である。このドイツ人の強制移送は『ブリキの太鼓』でも「貨車の中での成長」で描かれており、大きく異なることはない。ただ、『ブリキの太鼓』では、住み慣れた土地を離れざるを得ないオスカルに一抹の悲哀を感じ取ることはできるが、それ以上に貨車の中で彼の身長が伸びるということに、過去への決別と新たな希望を読み取ることができよう。一方、『ヨケーネン』には暗い現実があるばかりだ。『ブリキの太鼓』では貨車の中で死亡した男の体から衣服や靴が剥ぎ取られる場面があるが、『ヨケーネン』では、老婆の死後、彼女のベットの小犬が食用とするために殺されて皮を剥がれる。この残虐でおぞましい出来事は移送の悲惨で暗鬱な状況を象徴していると言えよう。移送は列車がブランデンブルクに到着することで終わる。ペーターはチフスで死に、ヘルマンは、著者と同じように、子沢山の寡婦に引き取られる。巻末の1頁半にわたるリストに31名の主な登場人物の運命が記述されている。21名が死亡したか行方不明になっているが、上述の寡婦については次のように記されている。そこには著者の養い親への感謝と、その働きを称える気持ちが込められているのではないだろうか。それはまた、同じように苦難の道を歩まざるを得なかった、そして最後まで歩き通した女たちへの頌辞として読むこともできるのではないだろうか。

ホルシュタインで子供たちを養う。落ち穂を拾い、畑に残ったジャガイモを拾い、少しだけ盗み、働きに働いて。彼女は子供たち全員をきちんとした、勤勉な人間に育て上げ、そして死ぬ。(423)

ところで、ロシア兵は、殺害し、強奪し、暴行する存在としてのみ、すなわち加害者としてのみ描かれているわけではない。マルタがかつて第一次大戦時に経験したようなロシア兵との触れ合いをヘルマンもまた経験する。いや、ヘルマンの場合はもっと個人的な触れ合いになる。ヘルマンは村に駐留するロシア兵の簡単な身の回りの世話をさせられるが、彼らの一人イワンがヘルマンを気に入り、いずれはロシアへ連れていくつもりでいる。彼にはヘルマンやペーターと同じ年の息子が二人いる。ただ、「彼には、彼らがまだ生きているかどうかよくわからなかった」(378)と語り手は述べる。なぜ生きていないと考えられるのか、その理由は提示されていないが、直接的にしろ、間接的にしろ、ドイツ軍の攻撃によるものであることを読者は想像させられる。このような手法<sup>7)</sup>、つまり、非ドイツ人による戦争犯罪に対してドイツ人による戦争犯罪を並列するような手法は、他にもいくつも見つけることができる。例えば、シュテプタートがロシア軍によるカチンの虐殺に

対して怒りを露わにする箇所があるが、その直後に「ザムエル・マテルンが死んだそうだ」(166)という別の登場人物の発言が続いて、ナチスによるユダヤ人の虐殺がほのめかされる。あるいはまた、ヘルマンが父親の新聞を密かに読む箇所では、ロシア軍によって初めて占領された東プロイセンの村ネマースドルフにおける、ロシア軍の村人への残虐行為に関する記事を読むが、続いて別の新聞では、SSによるワルシャワゲットー一掃の記事を目にする。しかもそこにはSS隊員となった搾乳夫アウグストの写真も載っており、それはヨケーネンもまたその「犯罪」から決して無縁ではないことを物語っているのである。この「並列」は恐らく偶然ではないであろう。ヨケーネンの村人たちは確かに被害者であり犠牲者ではあるが、しかしまた同時に加害者であるということ、敷衍すれば、ドイツ人一般が加害者であるということ、読者に意識させようとする意図が働いていると見ることができよう。さて、村人に移送命令が下された際、ヘルマン一人村に残ることを許されるが、結局ヘルマンもまたドイツへ行く決心をする。イワンはあえて引き留めず、ヘルマンにライヒスマルクの札束を持たせる。因みに、このライヒスマルクで移送途中にヘルマンとペーターはパンにありつくことができるのであるが、イワンとヘルマンの交情は、ヘルマンにとって、ロシア兵捕虜に普通の人間を見た経験と相まって、ロシア兵も同じ人間であるという認識を得るのに大いに与っていると言えよう。

『郷土博物館』において主人公でもある語り手はロシア軍からの逃避行を「自ら招いた不幸」「われわれ自身が種を蒔いた暴力に対する、情け容赦のない回答」(569)と捉え、自己の罪責を認めている。一方『ヨケーネン』では、確かに少佐やその息子のジークフリート、そしてフランツ伯父のように反ヒトラー、反戦争の立場を取る人物はいるものの、戦争を始めたことに対する罪責を自らのものとする人間は皆無である。シュテプタートはすべてを偶然とみなし、自らの罪を自覚することなくシベリアへ向かった。だが、上でみたように、語り手はヨケーネンにも罪があることを示唆している。それどころか、村がナチスの色に染まりつつある段階ですでに彼らの過ちがどこにあるのかをはっきりと述べているのである。すなわち、「行進している者と、それを見ている幾百万もの人々は、その行進を命じたたった一人の人間のみを信じていた」(91)と。これは「信じやすい人たちは全員サンタクロースを信じていた。しかしサンタクロースは実はガス会社の人間だったのだ」(164)という『ブリキの太鼓』の中の表現と呼応する。ヨケーネンの人々はマルタが言うように「誰にも何も悪いことはしなかった、誰もが自分の義務を果たしただけ」だったのかもしれないが、「たった一人の人間」を信じたが故に、「自ら不幸を招き」、「自ら暴力の種を蒔いた」のである。それは、グラスの言う「ともに走った者の罪」にほかならない。セバスチャン・ハフナーは、プロイセンの人々に対してなされた行為を「おびただしい残虐行為に満ちた戦争の最後の残虐な行為」として批判しつつも、「その戦争は、ヒトラーのもとにドイツが始めたものであり、数々の残虐行為も、残念なことに、ドイツ人が始めたものであった」と述べている。<sup>(4)</sup>それは誰もが否定し得ない歴史の事実である。そのことを十二分に承知した上で、ズルミンスキは、レンツやグラスのように戦後の視線で「過去」を検証するというよりはむしろ、自ら体験した者として、目撃者として、証人として、もう一つの「歴史の事実」を「記録」しておこうとしたのである。そして、そこにズルミンスキの小説家としての原点を認めることができるのではないだろうか。

注

- (1) Arno Surminski: Jokehnen oder Wie lange fährt man von Ostpreußen nach Deutschland?, Stuttgart 1974. 以後題名を『ヨケーネン』と省略し, 引用は1978年にハンブルクで刊行された版により, 引用文に続く括弧内に頁数を記す。
- (2) Günter Grass: Die Blechtrommel, Darmstadt 1959. 引用は Sammlung Luchterhand 147 (1974) により, 引用文に続く括弧内に頁数を記す。なお訳文は, 高本研一訳 (集英社) を使用及び参照した。
- (3) Siegfried Lenz: Heimatmuseum, Hamburg 1978. 引用は引用文に続く括弧内に頁数を記す。
- (4) Siegfried Lenz: So zärtlich war Suleyken, Fischer Taschenbücher Band 312, S. 117. 初版は1955年にハンブルクで刊行された。
- (5) Arno Surminski: Polninken oder Eine deutsche Liebe, Hamburg 1984, S. 118.
- (6) Vgl. Herman Beyersdorf: ≧...den Osten verloren≪ Das Thema der Vertreibung in Romanen von Grass, Lenz und Surminski, in: Weimarer Beiträge 1/1992, S. 60f.
- (7) Vgl. Ebd., S. 59f.
- (8) Sebastian Haffner: Preußen ohne Legende, Hamburg 1979. 魚住昌良監訳／川口由紀子訳『プロイセンの歴史』東洋書林2000年, 313頁。